

自己評価報告書

平成23年4月11日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520348

研究課題名（和文） フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究

研究課題名（英文） A semantical Study of Modality in French and Japanese

研究代表者

渡邊 淳也 (WATANABE JUN-YA)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：20349210

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：フランス語、日本語、モダリティ

1. 研究計画の概要

当研究課題では、動詞、(準)助動詞、副詞、連結辞、(メタ)比較など、さまざまなカテゴリーにまたがるモダリティの研究を、一貫した視点にもとづいて進めることで、モダリティが、どのような理路を介してさまざまな言語事象にあらわれるにいたっているのか、そしてそれらの事象相互はどのような関係にあるのかを見さだめることを目標としたい。主たる対象はフランス語、日本語とするが、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語などのロマンス諸語にも視野をひろげ、他言語との対照のなかからこそ明らかになる知見も積極的に拾いあげてゆくことにする。

この中間評価の対象となる各年度別の計画は、つぎのようになっていた。

研究の初年度にあたる平成20年度には、モダリティの各領域における具体的な研究対象となる諸表現のデータ収集、ならびに整理を行なうとともに、テストケースとしての事例研究をも開始し、全般にわたる基礎づけを行なう。

平成21年度、平成22年度は平成20年度に蓄積した基礎的データ、および試行的研究の成果をふまえて、他のすべての領域へと研究の範囲をひろげ、広範な事例研究を積みかさねてゆく。

各年度とも、各領域の専門家とともに研究会をひらき、それぞれの領域に固有の問題点やそれに対する見解をうかがい、議論するとともに、平成21年度以降はみずからも国内外の学会、研究会などで積極的に成果を発表することとする。

2. 研究の進捗状況

データについては、各言語での興味深い例を多数収集することができ、外国語についてはインフォーマント調査を行なうことにより、さまざまな形式の変異による容認可能性、ニュアンスの変化についての知見を蓄積するとともに、一部についてはすでに論文・学会発表などで紹介した。

事例研究としては、時制、語彙（とくに副詞類）、非人称表現などとモダリティとの関係、準助動詞の拘束的解釈と否定との相関についての具体的な研究を積みかさね、いずれの事例においても、研究対象となる表現（のカテゴリー）が固有に標示していると意味から、どのような理路を介することでモダリティな解釈が出てくるのかを明らかにしてきた。これについても、テーマの点ではかなり広い部分をすでに論文・学会発表などで公にしている。

また、理論面では、J.-Cl. Anscombe らの提唱するステレオタイプ理論が、当研究課題に対して重要な視点を提供してくれることが、研究の過程で明らかになった。

平素の活動としては、この3年間で5回、学外から講師を招いて講演会を実施したほか、12回の学内研究会を実施し、新たな知見を得るとともに、みずからの成果も問い、討議を行なってきた。さらに、3年間で「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」をはじめとする論文5件を公刊し、"*Toujours et yahari, adverbess reconfirmatifs de la stéréotypie*"をはじめとする国内外の学会での口頭発表7件を担当した。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

計画を前倒して初年度から学会発表を行なうなど、積極的に研究の発信を行ってきた。また、論文執筆についても、別欄にあげた論文を公刊したほか、平成21年10月のフランスでの発表、平成22年9月のチュニジアでの発表が、今後いずれも論文集の形になって公刊される予定である。さらに、モダリティの分野ではまだ未開拓といつてよい、ステレオタイプ理論の適用可能性が明らかになったことから、当初の計画にくわえて、ステレオタイプ理論の検討、ならびに同理論を応用してのモダリティ研究を展望できるようになってきている。

4. 今後の研究の推進方策

残りの2年間は、つぎのような計画にもとづいて研究を推進してゆきたい。

平成23年度は、ひきつづき、可能なかぎり多くの事例研究を積み重ねてゆきたい。動詞の時制・叙法の問題に関しては、本年度は、とくに現在分詞、ジェロンディフに注目して研究を行なう。その他、法的(準)助動詞、副詞についても研究を行なう。フランスで近年研究が進展しているステレオタイプ理論とのかかわりに留意しながら、フランス語・日本語の対照研究をすすめる。成果発表については、ひきつづき論文執筆、学会発表を積極的に行なう。

最終年度となる平成24年度は、23年度までに行ってきた研究を総括し、総合的な理論化をこころみる。研究代表者のみならず、講演者や、研究会参加者などの論考もまじえて、本研究課題全般の報告書を作成する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 渡邊淳也「フランス語と日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学)第58号, pp.55-74, 2010年, 査読あり. リポジットリ:
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M10/M1051383/5.pdf>
- ② 渡邊淳也「拘束的用法の *devoir*, *falloir* の否定の多義性について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学)第57号, pp.25-41, 2010年, 査読あり. リポジットリ:
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M10/M1028458/3.pdf>
- ③ 渡邊淳也「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』(日本フランス語学会)第43号, pp.77-83, 2009年, 査読あり.

- ④ 渡邊淳也「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学)第55号, pp.123-144, 2009年, 査読あり. リポジットリ:

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M98/M987413/5.pdf>

- ⑤ 渡邊淳也「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学)第54号, pp.15-44, 2008年, 査読あり. リポジットリ:

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M97/M971928/3.pdf> (さらに『日本語学論説資料』第45号にも再録された)

[学会発表] (計7件)

- ① WATANABE, Jun-ya. "*Toujours et yahari*, adverbess reconfirmatifs de la stéréotypie", 2010年9月, *La stéréotypie: Journées scientifiques tuniso-japonaises* (於チュニジア共和国マハディヤ).
- ② 渡邊淳也「フランス語の語彙意味論とメタファー・メトニミー」2010年5月, 日本フランス語学会シンポジウム『フランス語学と意味の他者』(於早稲田大学).
- ③ 渡邊淳也 "*L'approximatif en français et en japonais*", 2009年10月, フランシュ＝コンテ大学・筑波大学合同言語学セミナー(於フランス共和国フランシュ＝コンテ大学).
- ④ 渡邊淳也「拘束的モダリティの否定の多義性について」2009年7月, 日本フランス語学会フランス語談話会(於慶應義塾大学).
- ⑤ 渡邊淳也「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」2008年9月, 日本フランス語学会第250回例会(於慶應義塾大学).

[図書] (計2件)

- ① 渡邊淳也『明快フランス語文法』早美出版社, 2011年3月16日, 80ページ.
- ② 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也『フランス語学概論』駿河台出版社, 2010年4月1日, 240ページ.